

歴史探訪

クラブ

History Inquiry Club

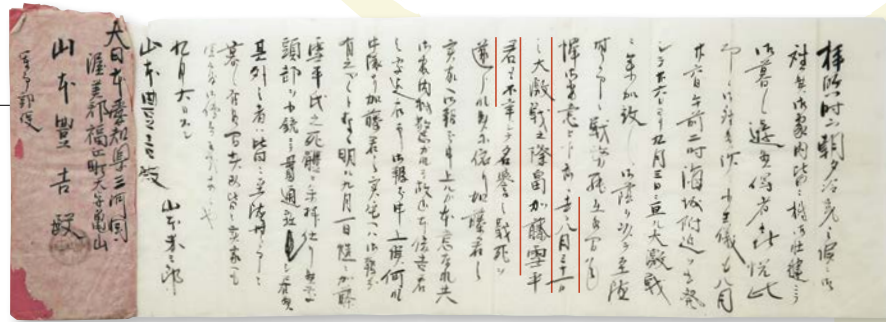


其の
167

文化生涯学習課 ☎ 22局 1720
(博物館) FAX 22局 2028

田山花袋の伊良湖来訪

明治31年(1898)の夏、柳田國男が伊良湖に滞在。恋路ヶ浜で流れ寄るヤシの実を見つけ、島崎藤村の叙情詩「椰子の実」誕生のきっかけをつくつたというお話は有名ですね。しかし、柳田國男の後を追いかけて伊良湖を訪れ、柳田と一緒に伊良湖を離れた小説家、田山花袋について知る人は少ないように思います。田山花袋は、明治4年(1871)に現在の群馬県館林市に生まれ、本名は録彌。明治・大正の文学を代表する作



●戦場からのたより 山本米三郎書簡(明治37年[1904]9月6日)
【渥美郷土資料館蔵】 ※加藤雪平氏の戦死を知らせる手紙

家のひとりとして広く知られた人物です。そんな花袋が伊良湖を訪れるきっかけとなったのは、柳田と共通の友人であった福江出身の挿絵画家宮川春汀の存在があったからです。花袋の紀行文『伊良湖半島』によると、花袋の伊良湖来訪は明治31年8月28日。豊橋駅から徒歩で、田原の風景や春汀の生家などを眺めながら逗留先の伊良湖へと足早に向かい、夕刻には、恋路ヶ浜で伊良湖の風景を堪能しました。この時、柳田は太田玉茗(こちからも共通の友人)を伊勢へ送るために福江の港まで行っており、不在でした。翌日、花袋は神島へ。その後続いた悪天候が9月3日によく回復すると、柳田とともに小中山の立馬崎

から伊良湖の古山を回り、夜には恋路ヶ浜の辺りを巡っています。そして、その翌日には伊良湖を後に福江港から知多半島の亀崎へと向かいました。花袋と柳田は、伊良湖滞在の記録を紀行文『伊良湖半島』『遊海鳥記』として残しています。文章を読み比べると、花袋の方が伊良湖への思いをより強く持っていたように感じます。ほかにも二人の作品の中には、伊良湖がたびたび登場します。花袋は伊良湖岬村出身の加藤雪平(文中では「三河国渥美郡福江村加藤平作」)を主人公とした「一兵卒」という小説を明治41年(1908)に発表。歩兵十八連隊として日露戦争に出征した雪平が戦場で戦死するまでの様子を描き、花袋もこの戦争に写真班として従軍し、二人は海城兵站病院で面会したとされています。柳田はその生涯で一度しか伊良湖を訪れていませんが、花袋は二度訪れています。二回目の来訪は、大正10年(1921)1月7日で、長男・次男を連れての旅でした。福江の旅舎から妻あてに出されたはがきには、自動車にて懐かしい伊良湖岬を周遊し、堀切の常光寺に立ち寄り、翌日には知

多半島に渡る予定ということが書かれています。また、花袋の『伊良湖の石門』(田山花袋記念館蔵)には、「角上という旅舎に行った。これも矢張昔のままだ。柳田君や太田君とやって来た時の室―その同じ室で子供達と鱈の刺身で午飯を食った。その室の長押にかかっている。蜀山人の横額も、曾て柳田君と一緒に読んで見た事のあることなどを段々思ひ起した。」とあり、前回(明治31年)は、柳田・太田とともに角上旅館に滞在していたことがわかります。皆さんも、田山花袋や柳田國男が地元について記述した文章を一度読まれてみてはいかがでしょうか。(天野)

今月の「表紙」

米づくりが始まった古代からこれまで、あまたの人々が待ちわびた収穫の時期。灼熱の暑さや風雨を乗り越え、誇らしげに頭を垂れる稲穂。夕日に染まり、黄金色がさらに輝きを増したその姿を見て、秋の訪れを実感しました。(H)

【表紙の写真】収穫を待つ稲穂(野田町)